

崔述の文学思想について

藤井, 良雄
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9785>

出版情報：中国文学論集. 7, pp.39-54, 1978-06-20. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

「崔述の文学思想について」

藤 井 良 雄

「考信録」を主著とする崔述の著作は、清朝経学研究の集大成ともいふべき阮元編「皇清經解」・王先謙編「皇清經解統編」の叢書にはついに一篇も編入されることなく無視されたけれども、日本では徳川末期から漢学者の注意を受けて来ているようである。何故かと言えば、岡崎文夫の述べたごとく「若し学者の傾向の中に博く識るを欲すると、寧ろ智識の統一を求むるとの両方面ありとすれば、崔述の如きは蓋し後者に属するものである。余の見るところでは、我邦の学者また多く後者に属する。崔述の学風が比較的日本に歓迎せらるる所以は実に其の共通点がある為めであろう。」^①ということになる。内藤湖南が、崔述は雑な博覧などせず狭い知識でも割合によい研究法で古代史を考究した古史家であると述べたのは、そのとおりであろう。崔述の「考信録」を那珂通世が狩野直喜から見せてもらい、「考信録」に卓見が多いのに感心して、「崔東壁遺書」^②（那珂通世校点版）を日本で刊行した（明治三十六年）。その後崔述が注目されるようになり、この氣運が中国にも伝わり、五四運動以後の

近代中国の疑古派の学者らによって顕彰せられた。ことの経緯は章学誠發掘の場合と似ている。章学誠については、日本で早く「支那学」第一巻に内藤湖南が「章実齋先生年譜」を寄稿しており、それを見た胡適が新たに「年譜」を作った。崔述の場合も胡適が那珂通世の「考信録解題」^③（『支那学雑誌』明治三十五年、第十三編第七号）を読んだ後、崔述の著作を研究して「科学的古史家崔述」を書いて発表してから、崔述の残した著作は中国でも注意され始めた。胡適の紹介に啓発された顧頡剛氏は、その後十五年間崔述に対して情熱を持続して、発見された崔述の佚文、日本人によって書かれた論文（先述の那珂・岡崎博士のもの等）の翻訳まで含めた評論、崔述についての伝記等を集め、さらに崔述の著作の索引を作成して、それらを附した大部の「崔東壁遺書」を出版した（一九三六年）。この書物は、それまでの崔述研究の集大成となったのである。

このようにして近代中国の疑古派の学者たちによって崔述研究や古代史研究が進められていったが、それは胡適の次の発言に啓蒙されたからなのである。

中国新史学は崔述からはじめて、彼の「考信録」をわれわれの

出発点にすべきであり、しかるのち更に一段と向上し進歩を謀ることを私は深く確信している。崔述は百年以上前すでに「大抵戦国秦漢の書は信を徴し難きこと多く、其の記するところの上古の事尤も荒謬多し。」と宣言している。われわれが彼の書を読めば、おのずと彼が疑ったところはすべて疑うべきこと、彼が偽書であると思つたものはすべて深くは信じられない史料であると確信するようになる。これは中国新史学の最低限度の出発点である。(「科学的古史家崔述」五頁)

胡適は、清代乾隆・嘉慶年間に生涯をおくつた崔述の「考信録」を、中国古代史研究の出発点であると高く評価した。崔述その人も「乾嘉の学」に連なるすぐれた考証史家であると認められたのである。

ところで、清代も乾隆・嘉慶の考証学全盛時代を迎えると、学者文人らの中には考据学(聲学)に没頭するあまり、それまで伝統的に中国知識人の必須教養である作詩に意を払わない一流の学者―戴震や段玉裁ら少数ではあるが出現する。このことは、黄宗羲と並び清朝考証学の祖と称せられる顧炎武が「日知録」の「作詩之旨」や「詩不必人人皆作」の項で、詩の本旨からいつて内容のないつまらぬ儀礼的な詩や飾りたてた詩なら作らない方がましだと述べたことの影響によると言われる。後には作詩は余技的なものだという主張まで現われて、清代において伝統文学の詩に対する觀念の変化が起つたとみなされるものである。顧炎武の影響は考証学の方面だけでなく、その詩や文学思想の面においても大きい。崔述自身も「余は独だ顧寧人の言を愛するのみ。「詩は当に世に用有るを求むべし」と謂ふは、最も風雅の指帰を得たりと爲す。」(「知非集自序」と言

っているように、確かに彼にも顧炎武の影響が認められよう。これまで崔述については、「考信録」を主著とした古史家としての評価はほとんどなかったが、また彼の詩についても適確な言及はなされていない。本論文では、崔述の文学思想について、彼が顧炎武の影響を受けていたことを考察し、その思想をどのように発展させていたかについて検討する。本論文が清朝考証学者の文学思想の研究一例ともなれば幸いである。

二

前述したように清代ではほとんど無視された崔述であるが、その名が後世にまで伝わったのは、師の著述を出版することに對する弟子陳履和の献身的な傾注があったからである。さらに初めて崔述の伝記「勅授文林郎福建羅源縣知縣崔東壁先生行略」を書いたのも彼である。陳履和は乾隆五十七年(一七九二)崔述五十二歳の時、偶然初めて北京で会っただけで、その後崔述の死まで書簡のやりとりを続けてはいるが、崔述の前半生については疎かたと思われる。その資料は、崔述自身が残した「考信附録」所収「家学淵源」「少年遇合記略」などであるが、陳履和は崔述の死後やっと一度大名府に赴いたのみで、崔述・崔邁の兄弟が北方でどのような評を受けていたか知るべくもなかった。陳履和の書いた「崔東壁先生行略」は、その師である古史家崔述を顕彰する伝記である。また顧頡剛がその「崔東壁遺書」に集めた伝状の類も陳履和のものに拠っていると思われ、大同小異で新しい記述はない。さらに

「清史稿」儒林伝三。

「清史列伝」卷六八。

関爾昌纂輯「碑傳集補」卷三十九。

李元度纂輯「国朝先正事略」三十六經学。

唐鑑「清儒学案小識」卷十四經学学案。

支偉成「清代樸学大師列傳」第十南北懷疑派兩大家列伝。

徐世昌「大清畿輔先哲伝」卷二十四。

張維屏「国朝詩人徵略」(二編)卷三十五。

梁啓超「中国近三百年學術史」四四五頁。

蔡冠洛編纂「清代七百人伝」一六二九—一六三一頁。

蕭一山「清代通史」卷中六二八—六三三四頁。

等にも經学家崔述についての記載があるが、このうち「碑伝集補」と「国朝先正事略」は陳履和の書いた「行略」をそのまま編入したものであるし、その他のものも学者としての崔述とその著作について述べてはいるが、彼の詩作や文学方面については全く言及していない。

崔述の学問の性質について、以前私も述べたことがあるが、清代においては、唐鑑(二七七八—一八六二)の「学案小識」が、

先生(崔述)の学は見聞を主として自信に勇む。考證有りとし雖も軒輊を従横し、意に任せて為す者亦た復た少なからず。況んや其の間に得る者は又強半は昔賢の已に言ふ所と為るをや。

というようにほとんど評価されず、崔述は理解されなかったように思われる。近代中国になって、前章で述べたように高く評価され始めたが、崔述の学問をより正当に評したのものとしては顧頡剛の「古史弁自序」の言に尽きる。

崔述の「東壁遺書」は古代史実を整理し、百家の謬妄を削り落

しているが、このことは私が以前「先正事略」を読んだ時知っていたが、この書はまだ見ていなかった。十年(一九二二)の一月に、適之先生が買って、私に送って見せてくれた。私は読んで大いに痛快だった。とりわけ私をびっくりさせたのは、彼が「提要」の中に引用している「打碎沙編校到底」のことわざである。「お前さんはまたしても「打碎烏盆問到底」のかえ?」これは私の祖母がいつも使った私の文句を禁じたことばである。思いもかけず「過細而問多」する癖は、私も結局崔先生と同じように犯していた。私はかなりの間弁偽の仕事をやっていて、自分の創設だと考えていたものがたくさんあった。ところが彼の書物のなかに明白に弁証してあった。このように規模弘大で議論精鋭の弁偽の大著作がすでに私より先に存在していたとは全く思いもかけなかった。私はとてもうれしくてそれを標点して刊行しようと志を立てた。しかし私は崔述に対し彼の偉大さを知ったが、同時に彼の欠陥にも気がついた。彼の經書と孔孟への信仰よりは過度にすぎる嫌いがあり、多くの先入主となった成見をまじえている。これは別に無理もない。彼は理学の家庭に生長したのであり、彼の著述の目的は聖道を妨礙するものを駆除することであり、弁偽はただ彼の手段であっただけである。だが私たちが今から彼よりさらに一歩進め、彼の目的をひっくり返し、徹底的な整理をすることは、大して難しいことではない。難しいのはただ数多くの制度名物とこまごまとした事蹟の研究である。この面でも彼はすでに私らに多くの詳細な考証をしてきている。私らは何と彼に感謝したらよいだろうか。

顧頡剛も胡適のあとをうけて、崔述が生涯にわたり研究して到達した点を大いに評価しながらも、彼が時代の制約を受けていたことも知っていた。顧頡剛の『崔東壁遺書』刊行の情熱は、実に崔述の史学家としての偉大さにあつたし、彼の「打碎沙鍋紋到底」して尽きぬ探究心への共感でもあつた。

胡適が「科学的古史家崔述」の稿を断片的に『国学季刊』に、その第一章（兼世）と第二章（年譜上）を載せてから、『国学季刊』が停刊したので稿を書くのを中断していた時、顧頡剛が崔述夫人成静蘭の「二余集」を、洪業氏が崔述の「知非集」を見つけ出したので、胡適は「科学的古史家崔述」の稿を改めたのである。それまで崔述の詩は、陶樸編『国朝畿輔詩伝』（一八三九年刊）に十五首、徐世昌編『晚清移詩匯』（一九二九年刊）に五首とらわれているだけであつた。

「知非集」の発見により「知非集自序」もその詩集に冠してあつたので、崔述の詩や文学思想について窺えるようになった。

さらに『大名府統志』六卷（咸豐三年版）の「文苑伝」にも崔述について記載があることを私は発見した。大名に関する地方志は、明代正徳年間のものから継続して編纂されて来ているが、乾隆五十四年（一七八九）版張維祺主編『大名県志』の執筆に、崔述も参加し健筆をふるっている。胡適「科学的古史家」崔述によると、この『大名県志』中には、崔述執筆の「大名水道考」の「漳水」「御河」二篇と「風土志」中にも崔述の詩「口当行」が載せられており、「大名水道考」中の二篇は崔述の文集『無聞集』にはその名が見えるだけの不備を補うものである。胡適や顧頡剛は、乾隆五十四年版『大名県志』を見ているが、先述の咸豐三年（一八五三）版『大名府志』附『大名府統志』は見えていないようである。この「統志」の原稿は、

崔述の少年時代勉学の世話をした当時の大名府知府朱煥が書いた乾隆年間の残稿を下地として続けたものであり、崔述、崔邁の伝記資料として今まで知られていなかった新事実があつて重要である。これらは大名在住の人々が執筆したものであり、崔述の死後初めて大名にやって来た陳履和の疎かつた方面と胡適らの作つた年譜を補う記述がある。原文は注に附記する。⁶⁰

崔述、字は武承、東壁と号す。乾隆壬午举人。天資穎敏にして、書に於いて読まざるところ無し。詩・古文辞に兼ね長じ、才名三輔に冠たり。羅源県知県を授けられ、政声有り。吏部考功司事に擢せらるるも就かず。相州に卜居し、戸を閉じ客を謝して、益ます学に肆力す。凡そ経史の疑義に發明有ること多し。著に三代正朔通考、洙泗考信録の書八十八卷有り。門人滇南の陳履和、之れが爲に鏤板し世に行はる。（『文苑伝』）

この資料から、新しく判明することは、「兼長詩古文辞、才名冠三輔」、「擢吏部考功司事、不就」と「卜居相州」の三点である。この三点について今まで一つも言及した資料はなく、『大名府統志』について顧頡剛も述べていない。無論その『崔東壁遺書』にも引用されていないのである。

「才名冠三輔」から、崔述の詩文の才名が少なくとも「三輔」の地で屈指のものであり、崔述前半生の詩文の評価が高かつたことが判明する。「三輔」の地とは古代では「三輔黄図」で有名な「陝西関中道之地」⁶¹である。崔述は二十五、六歳の時、陝西邠州（今陝西西青影堡）に行き、その地が原籍である成静蘭と結婚した。その約一年間の旅の途上で作られた詩が、『知非集』において彼の青年期の詩として目立つ作品群となっている。しかし、崔述はその陝西での

結婚と福建省知県任官の時以外は生涯ずっと大名府下で暮したのであり、詩集「弱弄集」・「棗帆集」・「知非集」は皆大名附近の保安・北阜・安陽でそれぞれ作られたのだから、「三輔」を「陝西関中道之地」とするのは間違いであろう。これはやはり「後謂京師附近之地為三輔」であり、「三輔」すなわち北京を囲む大名府をも含めた畿輔の地をいう。従って「才名冠三輔」とは崔述の才名が北方では屈指のものだったことを記すのである。

第二点は、羅源県知県就任後あるいは退いての帰郷後か、「吏部考功司主事」に拔擢されたが辞退したことである。清朝、吏部の主事は正六品であり、羅源県知県は外県知県で正七品だから、この時の拔擢は従六品を一階級飛び越した昇進であった。しかし、崔述は敢えてその任に就かなかった。この拔擢があったことを記すのは、私が見た「大名府統志」文苑伝（崔述）だけであり、前掲のごとく崔述の榮譽のために書かれた短い叙述で年月が不明である。おそらく嘉慶五年（一八〇〇）以降のことと思われる。翌年に彼は福建羅源県知県を罷め、翌々年（一八〇二）春に大名に帰郷したと陳履和「崔東壁先生行略」にあるからである。崔述年すでに六十一歳、若い先短い人生の暮方に差し掛かっていた。清代では科擧のむつかしさから高齢で任官する士大夫も珍しくなかったが、崔述にはすでに「聖人の道」を守る学者としての自負があった。彼にとつて高い官位も豊かな財宝もすでに欲するところではなかったのである。

余の閩に在るや、無名の征は悉く之を民より蠲き、有餘の税は悉く之を上に解す。淡泊清貧の況、惟だ百姓のみ之を知るに非ず、即ち上官も亦た深く之を信ず。然れども故郷の人、数千余里を隔て終に知らざるなり。帰里の後、人咸な以爲らく「携ふ

るに重資有り」と。既にして居を隘巷に僻り、家を山村に移す。其の飯一盃・蔬一盤なるを見て、猶ほ曰く「是れ且く深く藏して、肯へて自ら炫耀せず」と。（「考信錄提要」卷上）

崔述自身が述べているように、故郷に錦を飾ることもなく、郷里に帰る生涯にわたる貧困の中で「孜孜として古を嗜み書を著はして倦まず」、その学問を続けた。

第三点「卜居相州」とあるが、この相州は州名で臨漳県と安陽市には含まれる地、そこに彰徳府があった。また陳履和の「行略」にも、

魏故無定居。既歸、居大名。又居安陽西山、又遷彰徳府城。數值歲荒、典衣而炊、著作自娛。

とあるので確認できる。

以上見るように、「大名府統志」中の文苑伝（崔述）の資料は、彼の前半生の詩文について高く評価する数少ない崔述の文学方面に関する記述を含む。のみならず彼の生き方に関しても注意すべき部分を持つのである。

三

ビュアリは「思想の自由の歴史」の中で「人間の希望や不安や運命などとの関係を顧慮することなしに純粹に事実そのものを愛するという精神はいかなる時代にあつても珍らしい精神である。……これは科学的精神を意味する。」と言っている。西洋近代思想の開幕を担った人々、近代哲学の父と呼ばれるデカルト（一五九六—一六五〇）や数学者パスカル（一六三三—一六六二）たちは、その科学的精神を自覚していたので、それとは相容れぬ「神の存在」（宗教的權威）と衝突す

る。彼らが「神の存在」の問題に突き当たったとき、そのはね返りとして人間存在についての省察を深めて行ったのは必然のなりゆきであった。デカルトやパスカルの近代的思想の所産が彼らの残した「省察録」なのである。

中国においては、明末清初いわゆる「経世致用の学」を成立させた大動乱の時代が去って、清朝の中国支配が確立し、世の中が安定してのち清朝考証学が成立して来る。清朝考証学の方法は、以前の学問に比較してより実証的で科学的であったと言われる。しかし、この学を支えた人々には科学として学問を成り立たせる客観的理性「科学的精神」の自覚が薄かった。したがって、その学問は「主観的存在を否定する理性の立場に立つものではなかった。」^④のである。デカルトが「方法序説」で述べた人間存在を確認するための「理性」の自覚がなかったのである。但だ、人間存在のあり方についてならば、中国においても孔孟の古代から、「道」にかかわる「礼教的」問題として論ぜられて来たと言えよう。清代になって「体制教学としての朱子学」^⑤に批判的に起って来たのが考証学であるが、清朝考証学の巨人といわれる戴震は、その著者「孟子字義疏証」において、「人間性の論で、彼は人間性の根本は人間の生物性であるという観点から出発して、『人道は性に本づき、しかし性は天道に原づく』との結論を出した。」^⑥と評価されるように、人間存在を客観的生物学的に見て、それまでの「理学」が人間の欲望を否定する禁欲的方向にあったのに反対し、欲望を肯定する理論的根拠を与えた。戴震はより人間性に忠実であったわけである。彼のこの書の倫理学的立場の特徴として「客観主義と欲望の解放と」^⑦の二つが指摘されているとおり、清朝考証学の中での人間存在についての考察は

「孟子字義疏証」が例外的とみなされるごとく稀少なものであるけれども、自己の人間性に忠実であろうとした点では、より近代的色合いを帯びていたと言える。その点で、清朝考証学を支えた人々の中には、より近代的思惟をなした存在があるように思われるのである。

さて、崔述について考えるに、彼の近代的思惟といえるものは、やはり自己の人間存在について自省をくり返した思想のことであろう。崔述も自己の存在をある意味で突き詰めようとした人間である。このことにおいて、彼も自己に忠実で如何なる權威をも認めないという方向の近代的思想を有したとみなしておきたい。崔述は死の前年七十五歳の時、「自訂全集目錄」を作成し、自己についてこう述べている。

余三十より以後、即ち古の帝王聖賢の事を条記して之を次第し、四十以後、遂に此の録を為り、七十に至りて始めて成る。暇中復た増改を加え、又五年にして始めて定む。前後四十余年、畢生の精力尽く此の書に在り。……右の書三十四種、八十八卷自ら名づけて薄皮繭と為す。「薄皮繭」は、余ら魏人の方言なり。魏人は凡そ人の科名遂げずして僅かに卒貢を以て其の身を終るものと、仕宦遂げずして僅かに州県を以て其の身を終る者とに於いて、皆之れを自して薄皮繭と為す。蓋し蚤に強きもの有り弱きもの有り、故に其の繭に亦た厚きもの有り薄きもの有り。人樹立するところの者浅ければ、之れを成すところ無しと謂へば則ち不可、遂に之れを成すところ有りと謂へば則ち瑣瑣として道ふに足らず。故に之れを自して薄皮繭と為すなり。余幼くして先人の教へを受くるに、耳提面命、晨夕に閉む

こと無く、其の良臣と爲り、碩儒と爲るを望むなり。しかるに余の成就するところの者は是くの如きに止まる。故に之れを自して薄皮繭と爲すなり。世の論者皆謂ふ「経済は名を當時に顯わす所以なり、著述は名を後世に伝ふ所以なり」と。余の意竊かに以爲らく「然らず」と。人惟だ胸に所見有れば、之れを茹するも茹するあたはずして、故に已むことを得ずして紙筆を振りて以て之れを抒す。猶ほ蚕の葉を食ひて既に老い、絲は腹中に在りて、之れを吐かざらんと欲すれども能くせざるがごときのみ。名あると名あらざるとは、計るところに非ざるなり。之れを謂ひて薄皮繭と爲すは、其の美に稱ふなり。

崔述は死の前年までに、すでにこんな境地に達していた。自己の存在をつまらない「薄皮繭」とみなしてはばからなかった。むしろ彼はその存在を自ら選んで生きて来たのである。人間の生き方には二通りあって、政界で榮達し現世で名譽を得るか、それとも著述をして終世に名を残すかのどちらかだと世間の人は言うけれども、私はそうは思わない。自分の胸中に主張があつて、どんなに抑えようと思つても抑えきれず、やむを得ず紙にそれを書き付けるだけだ。それはちょうど蚕が葉を食べてしまうと今度は糸を吐き出さずにはおれず繭を作りたくなるのと似ている。崔述が自己を「薄皮繭」とみなした彼の人間存在は、現世の榮達とか後世に名を伝えるとかの目的があつたのではない。人間としての存在それ自体に価値があると言いたげである。この「薄皮繭」はどこかパスカルの「考える葦」に似ているではないか。

崔述にも「吏部考功司主事」に拔擢されて「州県」ではなく都へ出て「仕宦」の階を踏む機会がなかったわけではない。また前半生

の「詩古文辞」の才もすぐれたものであった。しかし、崔述は「詩古文辞」を「知非」の年五十歳に棄て、六十歳ではもう「吏部考功司主事」など顧みることにはなかつた。彼は自己の意志に忠実であることを努めただけである。崔述の人間存在には自らが課した課題があつたのである。顧炎武は「日知録」において「著書の難きこと」という論を設け次のごとく言っている。

宋人の書、司馬温公の「資治通鑑」、馬賁与の「文獻通考」の如き、皆一生の精力を以て之れを成し、遂に後世無かるべからざるの書と爲る。しかれども其の中少しく舛漏有るも、尚亦た免れず。後人の書のごときは、愈いよ多くして愈いよ舛漏あり、愈いよ速やかにして愈いよ伝わらず。然る所以の者は、其の書を成すを視ること太だ易くして、名を求むるに急なるが故なり。

「後世不可無之書」はどうしたら書くことが出来るか。それは崔述でも同じく「畢生の精力尽く此の書に在り矣」と自負できるほど、自らの精力を注ぎ込むよりほかなかつた。顧炎武から「後人の書物などは、多くなればなるほど間違いや漏れ落ちが多く、速く成せば成すですますます伝わることがない。そうなるわけは、書を成すことをあまりにも安易に考え、名声を求めようとあせるからだ。」と咎め戒められないようにするには、崔述は「経済は名を當時に顯わす所以なり、著述は名を後世に伝ふ所以なり」などと考えずに、ただ書かずにはおれないことだけを書きしかなかった。顧炎武の課題にこたえて、「後世不可欠」の著述をするには、崔述は「薄皮繭」の存在を選ぶよりほかはなかつたのであろう。

顧炎武は彼にとつて指針の人であった。彼は顧炎武について、「按ずるに百余年以来、讀書に卓識有る者は顧寧人先生より過ぐるもの無し。」(『古文尚書集傳』卷之三)とまで言っている。

顧炎武は朱子以後、崔述が最も心服していた学者であり、「日知錄」から崔述が時々引用するように、崔述はこれを愛読書としていたと思われる。さらに崔述の文学思想も、顧炎武の説に拠るところが大きいと言えるのである。

嗟夫、世の詩を談ずる者衆し。其の高き者は体格の升降を争ひ、其の下なる者は面貌の彷彿を争ふ。唐を貴び、宋を貴び、初盛を貴び、中晩を貴び、建安正始を貴び、元嘉永明を貴ぶ。其の言車載して斗量すべからず。然れども皆余の知るところに非ず。余は独だ顧寧人の言を愛するのみ、「詩は当に世に用有るを求むべし」と謂ふは、最も風雅の指帰を得たりと爲す。

このように「知非集自序」に述べているごとく、「顧寧人之言」をそのままではないが引いて、崔述自身の文学の「指帰」として用いるからである。「詩当求有用於世」を顧炎武の言として挙げているが、それは「日知錄」卷十九の巻頭の「文は須らく天下に益有るべし」を念頭に浮べていたものであろう。この「文須有益於天下」と題する文章は、顧炎武の「経世致用の学」的な文学論のモットーを表明したものであり、その内容は次のとおりである。

文の天地の間に絶つべからざる者は、曰く「道を明らかにするなり。政事を紀すなり。民隱を察するなり。人の善を道ふを樂しむなり。」と。此くのごとき者は、天下に益有り、将来に益有り。一篇多ければ、一篇の益多し。若し夫れ怪力乱神の事、無

稽の言、勦襲の説、諛佞の文あれば、此くのごとき者は、己れに損有り、人に益無し。一篇多ければ、一篇の損多し。

前半は有益な文章の価値を述べているが、この文学観は周敦頤(一〇一七—一〇七三)の「文は道を載する所以なり」の延長線上にあつて文を考えたものだと言われる。^③「明道」「載道」の文学観は、崔述の「文説」においても確認出来る。

画は物を貌る所以なり。黑白の色、方圓曲直の勢皆合すれば、之れを画と謂ふ。文は道を載する所以なり。是非得失の故、賢人哲士の事實皆合すれば、之れを文と謂ふ。(『文説上』) 夫れ韓退之、柳子厚は世の所謂文士なり。周茂叔は世の所謂儒者なり。然れども其の言皆曰く「文は以て道を明らかにす」と。(『文説下』)

かくして崔述も韓愈以来の「載道の文学」派の一人であることが判明する。清代で「載道」説を固守した古文家と言えば、方苞(一六八八—一七四九)、劉大櫟(一六九八—一七八〇)、姚鼐(一七三二—一八七二)の桐城派が崔述以前に出ており、「清朝の古文といえは桐城派を稱しないものはなく、むしろ現代文としての実用性をもつて一世を風靡した^④」と言われる。けれども、崔述の「文説」が桐城派の説の影響を受けたものと言える痕跡は全くないのである。崔述の「載道」の説は、自身の「理学」から出たものであり、その点で顧炎武の説を受け入れる素地があつたとみなした方がよい。また崔述の生涯から考えてみても、彼が当時の文壇の流派に関係がなかったことは自明のことであり、郭紹虞氏が崔述について「学者の文論」で論及しているのは妥当と思われる。

郭紹虞氏は崔述の「載道」説を確認して、さらに彼が「膾炙の見」を重んじた点を指摘し、そのところが一般の道学家と異なると評価している。

「文説上」に云っている、「賢人君子明理の士、固より文に工ならざる者有り。然れども未だ道において茫然として、膾炙の見無くして文を能くする者有らざるなり。」と。これは文を爲る根本条件である。「文は道を載する所以なり」、これは原来道学家でよく見かける論調である。しかし道を論じて膾炙の見を重じているのは、一般の道学家とはちがう。文を爲るのにそれを道に求めないのは、ただ作文法を求めただけで、これらもとより道がはっきりわかっている。たとえ道を論じてもありきたりを踏襲して膾炙の見がないのも、やはり同様に道がはっきりわかっている。それで彼は飲食に喩えている。「道は其の物なり、文は其の味なり。六経は稻粱の味なり。孟子と韓愈とは魚肉の味なり。班固・司馬遷・歐陽脩・柳宗元の言には間々膾炙有り。其の道有れども文美しからざる者は、に失ふ者なり。六経の遺文を無拾し、註疏の成説を勦竊して以て道を明らかにする者は、に食饑りて餓い、魚く餓れて肉の敗れたる者なり。莊周・韓非は聖人の道に非ざれども世に美なるを見るは、猶ほ葱ねぎ・姜がし・椒わかし・蒜あし、麋わし・鹿か・麝じやの肉味の正なるものに非ざれども人喜びて之れを食らふ者多きがごときなり。然れども土を烹に泥を煮るを以て味を求むる者と視れば、則ち物無しと謂ふべからず。世の心得るところ無くして古人の言を摹擬して以て文を爲す者と視れば、則ち道無しと謂ふべからず」と。この喩えは甚だ妙である。文と道とが不可分なのは、味と物とが

不可分であるようなものである。うまくに銜てなければ味が無く、陳ちんくて宿まのままなら魚は餓うり肉も敗やっててしまいい味が無い。よく銜につまるようにするためには、彼は「昌黎・柳州・廬陵の三家の文を取りて其の理を熟玩す。」（「上荘韓門先生書」）と自ら言い、それで自分が所見を抒べることが出来るようにした。陳腐にならないようにするためには、それでさらに必ず「膾炙の見」（意のすまからじつと集中して見つめるような鋭い洞察力）を持たねばならないのである。

さらに郭紹虞氏は崔述の文章論が章学誠（二七三—一八〇）のものと同かよっていると指摘するが、この点はすでに胡適や姚紹華によって言及されている。崔述と章学誠とは、二歳しか違わず二人とも生涯を貧乏の中で過して、地方志を手がけていることなど外面的にも似かよった点が多い。二人の間に影響関係があったかどうか、にわかに断定できないが、◎兩人とも顧炎武の名を自分の著述にあげているので、彼の影響を受けていたことでは共通していると思われる。

さて、崔述は「文説下」の最終部で、しめくくりとして、

「独だ近代文士のみ則ち「文は自ら文なり、道は自ら道なり。」と曰ふ。何ぞや。彼は語勢を摹擬するを以て道と爲し、陳言を無拾するを以て道と爲す。文の道と異なるに非ず、彼の所謂文は道と異なるなり。」

と述べて、「近代文士」を批判している。すでに顧炎武も「近代文章の病、全て摹倣にあり」と言っているが、それは前世紀十六世紀を風靡した「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」のスローガンを掲げた古文辞派の模倣を批判したものである。そして、その古文模倣の癖

は、清代乾隆嘉慶の時代にも悪弊を及ぼしていた。宮崎市定氏は、「当時不遇の名士はもとより、時には大官も、他人より墓誌銘、行状等の依頼を受けて潤筆料を得た。かかる売文生活乃至は内職の行われ得る社会には、屢々忌まわしき風習が起り、中には努めて自家広告に怠りなき一方、他人の中傷をもし兼ねまじき陋劣な手合も居り、ために毛を吹いて疵を求める体の文章批評も流行した。一字一句が揚げ足取りの対象となつては文士も筆の下し様がない。勢い、様に依つて胡蘆を描く式で、古文の文章を攔裂し、つぎはぎして自己の文とする。最も安易にして無難な所へ落ちついたので、所謂古文辞派である。」と述べているように、崔述も、古文辞派の摸倣に墮した「不情不理の文」と、道理も通せず自己も失い固有の味もない文章を書く「近代文士」を批判したのである。

文は道と載せるところのものであり、文と道とはもとより不可分のものなのである。ただ崔述にあつては「道に醇駁あれば則ち文に高下あり」と言つてゐるように、道の醇濁の度合いが文の値打の高下に関係してくる。文に載せられた道すなわち文の内容としての道の醇濁の相違はあれ、道を内容とした文章であるかぎりには容認できるのである。ならば崔述のいう道とは、どんなものであるのか。「文説上」で「物は形、道は理なり。形は然り、理は其の然る所以なり。其れ事の大小、品の高下殊なると雖も、其の理は一なり。」と言ひ、さらに「文説下」では次のごとく述べてゐる。

道なる者は物の理なり。其の人におけるや情と為り、その事におけるや義となり勢となる。之を大にしては天地聖人も尽くすあたはざる所、之れを小にしては愚夫愚婦も知るべき所、一章一木の消長する所以、皆道なり。文なる者は此れを載す者な

り。其の義頭はれ、其の勢悉く、其の情通ずるは、是れ文のみ。

これによれば、崔述のいう「道」とは、ものを成立させる道理であり、文がそれを過不足なく表現できればよいのである。そして、道の中では「聖人の道」が最も醇であり、過不足なく適確に表現した文は至美の文となるはずであるが、崔述はその理想型までは述べない。そこで飲食の比喻を持ち出した。文は書く人が道をよく熟していなければ固有の味は出てこないのである。文とは「其の義頭はれ、其の勢悉く、其の情通ず」ればよく、そうすれば自然と表現するところのもの―道―の固有の味が醸し出される。それが文の道にかなうことの意味であり、道の内容によつて文の多様性が出てくる。つまり著者が対象とした道をどれほど熟しているか、対象に対し果して「罅隙の見」を持つてゐるかどうかによつて、その人の文章に固有の味が具わつてくるのである。対象をまず「熟玩」しようとする精神は、崔述の近代的思惟を裏付ける特筆すべき点なのであり、彼独自の「罅隙の見」を重視する「文説」は、顧炎武が執拗に咎める「文人摹倣の病」を克服することにあつたのではないだろうか。

四

一九三一年幸いにも洪業氏が「燕京大学」図書館の破書のうずたかい山の中から「崔東壁知非集一卷」鈔本を見つけ出して、崔述の賦三首・詩百六十四首・詞十四首を眼にすることが出来るようになった。陶樸編「国朝畿輔詩伝」に選せられた崔述の詩十五首のうち、「西安」「卜居」の五律二首は、発見された鈔本「知非集」に存在

しないものであるから、現在われわれは崔述の詩百六十六首を読める。そして「知非集」には青年時代の友人紀聞歌の「弱弄集旧序」と崔述の「自序」が冠してあり、崔述に対する友人の評価と崔述の詩史観あるいは文学思想の一端がうかがえる。

乾隆戊子（二七六八）の年、紀聞歌が崔述の居る武安（彰德府属）にやって来て、二人して酒を酌み交した折に、崔述は友に自分の詩文を披露している。

首め「封建論二、治漳策一」を出す。纏纏として数千言、海のごとく潮のごとく、微笑を具して濟る。深く其の古文の聖手為るに服す。最後に詩稿一冊を出す。五七言、長短句、古体多きに居る。余之れを読むに衡山の雲を望むのごとく。滄海の水を観るのごとく、縹冥变幻して、名状すべからず。既に乃ち喟然として曰く「雕蟲は小技にして、丈夫は為さず。吾乃ち東壁の今を薄せずして古を愛するは故有るを知れり。」と。

紀聞歌は崔述を「古文聖手」と誉めているが、先述した「大名府統志」の「詩・古文辞に兼ね長じ、才名三輔に冠たり。」に附合する。そして崔述の詩詞が「縹冥变幻」することに讃嘆しながらも、崔述が現世のこと例えば治水事業や飢饉対策（「大名水道考」「救荒策」）に大いに力を尽くし、古の聖人の道を極めようとしていることを紀聞歌は知った。さらに続けて、紀聞歌は崔述の詩を讃える。

以へらく東壁の才情豪邁にして、豈に六韻八韻の能く拘ふるところとならんや。天馬空を行き、羈約を以て繋ぐべからざるを知る。以へらく東壁の識議卓越にして、豈に平平仄仄の能く縛るところとならんや。神龍変化して、尺沢を以て困すべからざるを知る。……故に其の詩を為るや、渾浩流転、疎落磅礴、沈

鬱痛快、蘊藉の風流は体として備はらざる無く、美として具はらざる無し。「屈宋を得て衙官と作す」と曰はずと雖も、已に駉駉として李杜韓蘇の堂に登りて其の轍を咀む。而れども要は東壁自ら其の性情を陶写し、其の学問を發揮すること、斤斤として古を斬り合はせて古の迹を留摩するに非ざるなり。

紀聞歌が友人崔述の詩集のためにした序であるから、少し誇張があるかも知れぬ。紀氏のいうごとく崔述の詩がヴァラエティに富み「蘊藉風流」であり、李白・杜甫・韓愈・蘇軾を受け継いだところがあるにしても、それは「斤斤として古を斬り合はせて古の迹を留摩する」のではなく、崔述の「熟玩」精神によって「自ら其の性情を陶写し、其の学問を發揮」したものである。紀聞歌が見たのは崔述の二十八歳までの詩であったが、現在の「知非集」にはその一部しか残らない。しかし、紀聞歌の「弱弄集旧序」によって、崔述のその歳までの詩の傾向を知る手掛かりを得、後年の彼の思想形成の生地を考察することができる。

崔述は五十歳になって二十代の詩作を「弱弄集」に、三十代の詩を「案帆集」と名付けて編纂し、この二集に併せてそれ以後に作った詩をまとめて新たに「知非集」を編んだ。その「自序」の中に顧炎武のことばとして「詩当求有用於世」を引用したのである。この「知非集」編纂の時にはすでにそのことばに代表される文学思想を有していたと言えよう。だから、編纂方針の面でも、「其の情感の事を言ひ、義は諷諭に近き者を択びて、二十八首、首めに之れを列して近古編と曰ふ。」と述べて、「義近於諷諭者」を冒頭に列しようとしたのは、やはり顧炎武が「作詩の旨」の論において白居易の「諷諭詩」を高く評価した発言によるであろう。「知非集」は「近

古編」二十八首に続けて「貴興編」三十八首、「諧俗編」九十二首と三編に分けて編纂されたはずである。だが、今に残る「知非集」は、賦三首、詩百六十四首、詞十四首の順に並ぶ鈔本であり、当初崔述が意図した「知非集」編纂の内容とは体裁を異にしている。それに「鈔本」に残存する首数も、洪業の指摘することく、崔述生涯の詩総数の三分の一以下なのである。ともかく「知非集自序」はそのままであるから、それによって崔述の標榜する「知非」すなわち五十歳の文学思想をうかがうことができる。

雅頌以て盛徳を紀し、成功を告ぐ。しかしして風は政治風俗の得失を觀るを以ての故に以て世を縫むべく、以て人を感ぜしむべきは詩の用なり。周衰へ、楚人始めて其の荒唐悠謬の詞をはしまにす。漢興りて、揚・馬・班・張は競ひて繁麗を陳ぶ。建安以降、益ます風雲月露の中に沈溺す。是に於いて詩は浮靡綺麗の詞となり、用に適ふこと無くして詩は一変せり。然れども其の言に物無しと雖も、猶ほ各々自ら成る。

其の言爲るや、沈約より始めて四声を調し、陳隋の際に競ひて俳偶を尚ぶ。永徽神龍以後、穩やかに声勢に順ひ、之れを律詩と謂ひ、遂に意をおいはら驅ひて以て詞に就く。是に於いて詩は矯揉造作の物となり、其の情を暢べずして又一変せり。其の中豪傑の士時に間々出るもの有りと雖も、然れども古を希ふは其の衆に従ふに勝へずして、其れ専ら古を爲して律を爲さざる者、三唐より已に人を數へず。用に適ふこと風雅のごとくなるを求めんと欲する者に至りては、則ち毎に名人集中僅かに十の一二のみ。甚し、風俗の人を移すは、賢者と雖も免れざるところ有り。

然れども宋元より以前は、高下巧拙の殊なるもの有りと雖も、要は皆自ら其の意を写し、自ら其の詞を琢す。明前後七子出でてより、始めて唐人の音響を揣摩して以て詩を爲す。鍾・譚・錢・吳・王・朱の倫相とがひ繼いで起り、其の体迭に相ひ改易せり。論も亦た迭に相ひ訾毀し、其の主旨を要すれば、皆勦竊依倣して以て語言に工ならんことを求むるを出でず。是に於いて詩は仮設偽造の言と爲り、我に涉ること無くして詩又一変せり。而して詩亡ぶに幾し。

この崔述の詩史観はまさに顧炎武の「詩体代々降る」の説を念頭に置いていたものではないか。崔述は「自序」の冒頭において「詩は唐虞より今に至るまで、凡そ幾たびか変じたり。」と言ひ起こして、自己の詩史観を開陳した。「周衰へ、楚人始めて其の荒唐悠謬の詞を縦にす。」と判断することく、「詩経」は最高のものであって、それ以後詩の「変」を述べる。その変は彼にとつて質的にも量的にも下降と考えられたのである。顧炎武は「日知録」巻二十一で「詩体代降」の説を述べている。

三百篇の降りて楚辭たらざる能はず。楚辭の降りて漢魏たらざる能はず。漢魏の降りて六朝たらざる能はず。六朝の降りて唐たらざる能はざるは、勢なり。一代の体を用ふれば、則ち必ず一代の文に似て、しかる後合格と爲す。

詩文の代々変ずる所以は、変ぜざるを得ざる者有ればなり。一代の文、沿襲已に久しければ、人人皆此の語を道ふべからず。今且に千數百年ならんとす。しかるに猶ほ古人の陳言を取り、一一にして之を摹倣し、是れを以て詩と爲すは可ならんや。故に似ざれば則ち詩たる所以を失ふ。似れば則ち其の我たる所以

を失す。李杜の詩、独り唐人に高き所以の者は、其の未だ嘗つて似ずんばあらずして、未だ嘗つて似ざるを以てなり。此れを知る者与に詩を言ふべきのみ。

崔述はこの説を含める顧炎武「日知録」の文学論を念頭に置いていたにちがいない。顧氏が「八以て民の風を觀る、此れ詩の用なり。」（「作詩之旨」）と言へば、崔述も「風は政治風俗の得失を觀るを以ての故に以て世を経むべく、以て人を感ぜしむべきは詩の用なり。」と「詩の用」を述べる。また「日知録」「作詩之旨」で「建安以下、齊梁に洎およぶまで、所謂八辞人の賦は麗以て淫、此にして、作詩の旨に於いて、之れを失ふこと遠し」とあれば、崔述はこれを注釈するかのように「建安以降、益ます風雲月露の中に沈溺す。是に於いて詩は浮靡綺麗の詞となり、用に適ふこと無くして詩は一変せり。」と述べる。さらに「近代文人」については、顧氏の「しかるに猶ほ古人の陳言を取り、一一にして之れを摹倣し、似れば則ち其の我たる所以を失す。」を受けて、崔述は「詩は仮設偽造の言と爲り、我に涉ること無くして詩又一変せり、」と述べる。

かつて崔述は青年時代に、李白・杜甫について、「常に恨む謝靈運の李太白に見えずして、妄りに「古今の才人に於いて一石に止まる」と謂へるを」（五絶「論詩」）と歌い、また「大なる哉少陵の詩 上下三千年 建安何ぞ道ふに足らん 王孟寧くんぞ比肩せんや 韓歐後爲り難く 屈宋前爲り難し 詩有りて自従り来こ公の詩篇無し……」（五古「統詩」）というように絶対的に心服していた。しかしながら、おそらくは顧炎武の詩論を知つての後、崔述はあら

ためて李杜の詩を「熟玩」してみても、「用に適ふこと風雅のごとくなるを求めんと欲する者に至りては、則ち毎に名人集中僅かに十の一二のみ。甚し、風俗の人を移すは、賢者と雖も免れざるところ有り。」と認識したのであらう。

明末の文学流派の一つである竟陵派の鍾惺（一五七四—一六三四）、譚元春（一五六—一六三三）に対しても顧炎武は評価しなかった。その後の錢謙益（一五八—一六六四）、吳偉業（一六〇九—一七一七）、王士禛（一六三四—一七二二）、朱彝尊（一六二九—一七〇九）を、崔述は引き合ひに出しているが、彼らは顧炎武とほぼ同時代で皆顧氏と關係があった明末清初の高名な詩人たちである。顧炎武が彼らと異なるのは、節を曲げることなく遺臣の生涯を全うしたからである。崔述はおそらくその点に感じるところがあった。彼が「錢吳王朱」に対して否定的であったのは、その実際について彼が何ら他に記述していないので述べることはできないが、まずは顧炎武と彼らとの生き方の比較が彼の心にあつたことだらう。述の弟崔邁もまた、「尚有堂説詩」において、王士禛と朱彝尊の詩に対して、不満の意を述べている。

之れに本づくに性情を以てし、之れを出すに本色を以てし、之れを鎔かすに学力を以てし、之れを運らすに真氣を以てす。四者備はざれば、詩と言ふべからず。王貽上の詩は性情無く、朱錫鬯の詩は本色無し。

崔述は、弟であり学友であつた邁と同じ立場にあつたとみなしてよいのである。

崔述の学問が清朝考証学の中で孤立していたように、彼は清代の詩文壇の潮流の外にあつた。過度に格律を重視したがために「我」

を失ってしまった乾隆帝の大官沈德潜（二六七一—一七六九）の「格調説」は言うまでもなく、「性靈の描写を要求するテーマは大部分が士大夫の暇つぶしの山水の閑情逸趣や退屈な贈答詩や平凡な応酬体」であった袁枚（二七二—一七九七）の「性靈説」とも、崔述は関係がなかったと見た方がよい。彼は三十歳前後で科擧を断念し父の希望を継いで学問を志してからは、詩作を自分の主目的とは考えなかった。詩作するのは「自序」に言うごとく「聊頼無きの中に於いて、輒ち復た詩を借りて之れを遣る」だけであった。「知非集」の後、福建任官時の「小草集」（叢佚）があるだけで、それ以後詩作は無かった。顧炎武が「詩は必ずしも人人皆は作らず」と言ったことは、戴震や段玉裁だけでなく崔述の後半生に当てはまってくるのである。すでに詩文に意を払わなくなった史学者崔述であった。

顧炎武は「与人書十七」の中で、「君の詩の病は杜有るに在り、君の文の病は韓・歐有るに在り。此の蹊徑を胸中に有せば、便ち終身、依傍の二字を脱せず。断じて峰に登り極に造ること能はず。」と戒めているが、その「依傍」の二字を心から無くすること、この点が乾嘉の学の基礎であり、後の戴震が「与某書」で「道を聞くに志すからには、必ず依傍するところを空しくする。」と言うのと同じ精神である。清朝考証学者にとって顧炎武は大きな存在であったのである。崔述は乾嘉の学の中で孤立した学者であつただけに、顧炎武との韜帯の意味はより重大であつた。顧氏が「一代の体を用ふれば、則ち必ず一代の文に似る。」（「詩体代弊」）と言えば、崔述はその考え方を自分なりに発展させて、自らの学問の方法を考案するのであつた。

唐虞には唐虞の文有り、三代には三代の文有り、春秋には春秋

の文有り、戦国秦漢より以て魏晋に迄ぶまで亦た各々其の文有り。但だ其れ文のみ然るに非ざるなり、其の行事も亦た多く相類せざる者有り。是の故に、戦国の人三代の事を称述するも、戦国の風氣なり。秦漢の人春秋の事を称述するも、秦漢の語言なり。史記直だ尚書春秋伝の文を録すれども、しかも或ひは秦漢の語を雜ふるを免かれず。偽尚書極力唐虞三代の文に摹すれども、しかも終に晋の氣を脱する能はず。他無し、其の平日聞るところ見るところ皆是くのごとく、習ふを以て常となして自ら覺らざれば、則ち必ず自ら忽として經意せざる時に呈露する者あり。少しく心を留めて以て之れを察すれば、甚だ知ること易きなり。……余は生平成見有るを好まず、書に於いては則ち書に就きて之れを論じ、事に於いては則ち事に就きて之れを論じ、文に於いては則ち文に就きて之れを論じ、皆人の見存無し。

このように崔述は「考信録提要卷下」で論じているところから察すれば、顧炎武の考え方に立って、崔述が自分の古代史研究に適用したところがあり、「用一代之体、則必似一代之文。」という顧氏の指摘を自分の文章判断法の要とした。そこに崔述なりの発展が見られる。「考信録」の研究方針設定の考案は顧炎武に負っていたと言つても過言ではない。そして、崔述は自分の「熟玩」精神から、「文を以て文を論じ、事に就きて事を論ず」の立場を、古代史研究において徹底させたのである。

以上見て来たように、崔述は乾隆嘉慶時代に生涯をおくり、より近代的思想を保持することによって、それまでの道学者的な「載道の文学」の地平を抜き出た、より人間の個性に基づく「固有の味」

のある文を是認する。それが「道」に反しないかぎりではあるが。すでに「知非」の年に詩作を断ってきた後年の崔述の文学思想は、その根本を顧炎武に拠りながら、それを「道」のため「衛道」のため、自らの史学の中に昇華させていったのである。

結 び

崔述は生涯の性癖となるほどにひたすら自己に忠実であることを努めた。これは彼自身が言うように、幼年時代の純真な気持を忘れないで、年七十歳となり眼がうすくなったとき、「困風」の詩を口ずさむことに楽しみを見出したことからでも気付く。一方では「困風」を「雅頌」と切り離して、別の方向から論ずることになった。

崔述は青壮年時代、北方少くとも畿輔でかなり詩文の才名があったことが、新たに「大名府統志」「文苑」を閲して判明した。

崔述は、乾嘉の学の時代に生涯をおくり、その学風の影響を受けて。そして、親譲りの「理学」を彼なりに熟して、朱子学を權威としてではなく一人の学者の見識として参考にすることができた。崔述も戴震と同様に「道を聞くに志すからには、必ず依傍するところを空しくする」ことを心掛けた。その下地は彼自身の「熟玩」精神にあったと言えよう。

崔述の文学思想については、「文論」「知非集自序」を中心に検討考察することにより、顧炎武『日知録』の「文は須らく天下に益あるべし」を守ろうとした文学観であると判明した。おそらくは崔述「考信録」を支える史学の思想も、顧炎武に由来していると思われるが、果して突き止められるかどうか。崔述の文学思想は元來「載道の文学」の流れにあったが、顧炎武の影響の下で、それを崔

述固有のものに展開させて、自分のライフワークとする古代史研究の方針「文を以て文を論じ、事に就きて事を論ずる」ことを、史学の方法としたのである。言うなれば、顧炎武の存在と思想は、崔述にとって彼の文学思想を「史学思想」に発展昇華させる酵素であった。崔述の文学思想もまさしく彼の史学を支えていたのである。かくして、顧炎武の影響を強く受けた崔述の「史学」は、各時代の事から各時代の文を了解し、さらに各時代の道を探求する古代史研究を進めて、清朝考証学における一つの峻峰となったのである。

註

- (1) a、内藤湖南著『支那史学史』、全集第十一巻三九三頁（筑摩書房）。
b、神田喜一郎著「内藤湖南と支那史学史」『敦煌学五十年』（同右）。
- (2) 岡崎文夫著「崔述の辯護についての考」『支那学』第四巻四三三号（弘文堂）所収。
- (3) 前掲（1）a三九四頁。
- (4) 近藤光男著「清詩文」『中国文化叢書⑨文学史』（大修館書店）所収。
- (5) 佐藤保著「清詩文」『中国文学史』（東京大学出版会）所収。
- (6) 郭紹虞著「中国文学批評史」中「清代学者之文論」に「崔述」有り。
- (7) a、張維屏撰「國朝詩人叢略二編」巻三十五には、伝記と著作解題があるのみ。
b、楊鍾羲撰「雪橋詩話統纂」巻五には崔述の時について「晚唐に近し」とあるが、それは顧祖禹案にあるように、「載讀時伝」中の崔述時十五首を見ただけのことである。本論文では崔述時については述べない。
- (8) 嘉慶二十三年（一八一八）に書かれ、道光四年（一八二四）版「崔東壁先生遺書」に附す。
- (9) 下記のものと同重なるものがあるが、その「伝状目」は、陳慶和「前掲（8）」・劉大紳「崔東壁先生行略跋」・唐鑑「大名崔先生学案」・李元度「崔東壁先生事略（附陳慶和）」・徐世昌「崔述伝（附崔述）」・劉師培「崔述伝」
- (10) 拙稿「崔述「統風偶論」の著述意図について」（中国文学論集第六号）。
- (11) 朱士嘉編「中国地方志録（增訂本）」一八頁（商務印書館）。
- (12) 「崔述、字武承、号東壁、乾隆壬午舉人。天資穎敏、於書無所不誦。兼長時古文辭、才名冠三輔。授麗澤縣典史、有政声。權吏部考功司主事、不就。卜居相州、

閉戸謝客、益肆力於學。凡經史疑義、多有發明。著有三代正朔通考、洙泗考信錄等書八十八卷。門人淮南陳履和、為之續板、行世。妻成氏、著有續余集、墨桑集。詩章亦行於世。」

- (13) 「辭源」子一八頁。
- (14) 「中文大辭典」第一冊二六六頁。
- (15) 徐世昌撰「大清續編先哲伝」卷二十四、十二頁。

- (16) J・B・ビュアリ著、森島恒雄訳「思想の自由の歴史」第六章「合理主義の生長」(岩波新書)。
- (17) 西順藏著「戴震の方法」(東京支那学報第一号)。

- (18) 小野和子著「儒教イデオロギーにおける正統と異端」『世界歴史』第十二卷(岩波講座)所収。
- (19) 戴震撰「孟子字義疏証」何文光整理「点校説明」(中華書局)。

- (20) 安田二郎「孟子字義疏証の立場」『戴震集』二三頁(朝日文明選八)。
- (21) とは言っても、「志存閑道、必空所依傍。」ということばに象徴させるように、「聖人の道」の絶対的權威は時代の制約として逃れることは出来なかった。前掲(17)参照。

- (22) 松浪信三郎訳「パンセ」。「考える輩」私が私の尊嚴を求めるべきは、空間に関してもではなく、私の思考の規定に關してである。いかに多くの土地を領有したとしても、私は私以上に大きくはなれないであろう。……(『世界教養全集2平凡社』)

- (23) 清水茂訳注「顧炎武集」三九九頁(朝日文明選七)。
- (24) 倉石武四郎著「中國文学史」一四〇頁(中央公論社)。

- (25) 姚紹華作成「崔東壁年譜」附録「崔東壁之史学」(商務印書館)。
- (26) 崔述は一七八四年から時の大名府知府張維祺主纂「大名縣志」の執筆に参加した。張維祺は章学誠の友人で、章氏は彼のもとに身を寄せたことがある(胡適「章太炎先生年譜」)。崔述はもとより大名に在任していたが、前年母が、翌年六月弟邁が死んで「由是輟詩數年」ほどの状態であり、章学誠に会い「史学」を論じたかどうか、謎である。

- (27) 宮崎市定著「章学誠の文章論」『アジア史研究第三』(東洋史研究会)。
- (28) 洪業「跋崔東壁知非集」は、この経緯を詳論する。

- (29) 「常恨謝靈運 不見李太白 妄謂古今才 於人止一石」(論詩)。
- (30) 「自從仰大華 天下無奇山 自從俯黃河 九州無洪川 山川無處方 眼大不足觀 大哉少陵詩 上下三千年 建安何足道 王孟章比肩 韓歐難為後 屈宋難為前 自從有詩來 無公之詩篇……」(詠杜詩)。

閉戸謝客、益肆力於學。凡經史疑義、多有發明。著有三代正朔通考、洙泗考信錄等書八十八卷。門人淮南陳履和、為之續板、行世。妻成氏、著有續余集、墨桑集。詩章亦行於世。」

- (31) 「日知錄」卷十八「鍾惺」。

- (32) 「崔東壁遺書」(顧頡剛編訂版 上海亞東圖書館印行)所収。
- (33) この他にも吳宏一著「清代詩学初探」一九八頁に、「崔邁『寸心知詩集』中「詠王阮亭詩集云、「一時爭附尾、沒世已吹毛」。」「詠朱竹垞詩集」云、「如何求貌合、不復惜神離」可証。#と指摘がある。この書は「第三節 王士禛的反对者」の一人として「崔邁」の項を設ける。袁枚との関係は何ら言及なし。

- (34) 萩尾長一郎著「中國文学史」(福岡大学人文論叢八)。
- (35) 拙稿前掲(19)参照。

- (36) 崔述「詠風偶識」(龍風補説)。
- ※ 崔述からの引用は「崔東壁遺書」(顧頡剛編訂版)による。顧炎武は、黄汝成「日知錄集釈」(世界書局版)・「顧亭林詩文集」(中華書局香港分局版)に掲げる。